

愛知県愛西市立草平小学校

問い合わせ先: 電話番号0567-28-2569

I 学校の概要

1 児童生徒数, 学級数, 教職員数(平成20年1月)

- (1) 児童数 518名
- (2) 学級数 18学級(特別支援学級を含む)
- (3) 教職員数 32名

2 地域の概況

本校の位置する愛西市は平成17年4月に佐屋町、立田村、八開村、佐織町の2町2村の合併により誕生した。名古屋市の西方20kmにあり、岐阜県、三重県との境界に位置している。地勢は平坦で、木曾川の沖積層という肥沃な土壌に恵まれ、ほぼ全域が海拔0m以下となっている。農地や水面をはじめとした自然が多く広がっており、学区となる佐織地区も市街化区域が約5%、農地、調整区域が90%以上を占めて、豊かな自然に恵まれている。児童は登下校を含め生活の場が豊かな自然に囲まれているため、四季折々の動植物と触れ合いながら、のびのびと日々をすごしている。学校では学年の花壇や畑があり、季節に合わせて土に触れながら収穫や栽培の喜びを味わっている。

児童にとって、豊かな自然に恵まれた環境は、日常の生活の場として当たり前環境であり、特に恵まれているという意識はなかったが、環境学習を進めてきたことにより、身近な環境に関心をもち、今ある豊かな自然を守っていこうとする意識が高まってきている。

3 環境教育の全体計画等

環境教育の目標は「人と環境の共存」とし、人が生きていくためには水も動植物もすべての環境が大切であり、最終は「すべての命の大切さ」につなげて環境教育を行なうこととした。最初に、児童をとりまく「環境とは何か」を具体的にとらえ、低中高学年で、目標を明らかにした。

低学年は「自然環境」とし、児童の身近にある自然を中心とした環境そのものをとらえさせる。

中学年は「地域環境」とし、生活の場から県内における自然、生活を対象とした地域までとらえさせる。

高学年は「社会環境」とし、広い視点から自然をとらえ、生活や文化にも目を向けさせる。

環境教育を進めるにあたり、これら「自然環境」「地域環境」「社会環境」を発達段階に合わせてなが

ら、常に児童の生活との関連を大事にし、かけがえない環境を大切にしたいという気持ちをもたせることをねらいとした。

II 研究主題

「環境、その明日を考える」

一 自然・地域・社会とともに

歩める子どもをめざして 一

研究主題の設定理由

環境に関連する学習を各教科等において体系的、継続的に行っていけば、環境に対する豊かな感性が養われ、確かな見識を持って、進んで環境にかかわろうとする子どもが育つであろうと考え、本主題を設定した。

III 研究の概要

1 研究のねらい

(1) 育てたい子ども像

最初に本校の環境教育を通して育てたい子ども像を次のように考えた。

① 豊かな感受性を育成する教育(心を育てるために)

- ・ 身近な環境の様子について関心を持ち、豊かな感受性を持つ子
- ・ 遊びや体験を通し、自然を大切にしようという心をはぐくめる子
- ・ 人間の活動と自然との調和を大切にする子

② 活動や体験を大切にする教育(考え行動できるために)

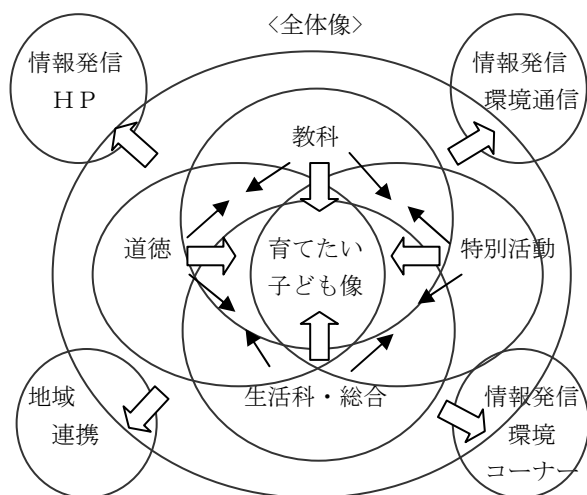
- ・ 環境を思いやり、よりよくしていける子
- ・ 環境とのかかわりの中で、考え、判断し、行動できる子
- ・ 心身の健康を、取り巻く環境から考え実践できる子

③ 身近な問題を重視する教育(よりよく生きるために)

- ・ 課題を見つけ、追究し、創造したことが生かせる子
- ・ 家庭、地域社会の生活の中で、環境にふれあい働きかける子
- ・ 環境とともによりよく生きるために実践できる子

(2) 全学年のねらい

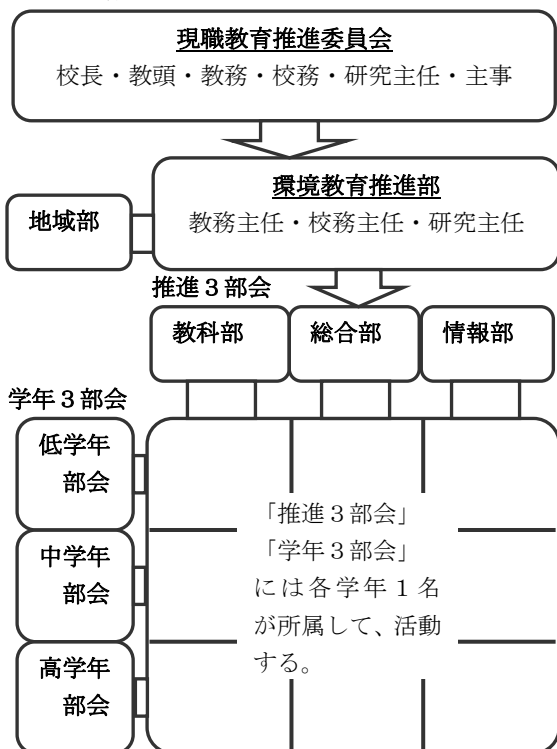
本校では、すべての学年で環境教育を推進するという視点で、各教科の年間カリキュラムを見つめ、環境に関連する内容をまとめ、環境ナビゲーション作りを行うことで、各教科、道徳、特別活動の目標や内容の見直しを行なっていく。これにより各教科等の内容の中にある、環境教育に関連する内容を取り上げ、教科等の学習から環境学習を進めることを大きなねらいの一つとした。



また、他教科との関連を図っての環境学習指導も系統的に学習の積み上げることにより、どの学年においても成果を上げることができると考え、図の全体像のように、環境教育を教科、道徳、特別活動、生活総合のすべての教育活動で取り組むことで、育てたい子ども像にせまりたいと考えた。例えば理科の発展的な内容「生き物がすみやすい川づくり」をさらに広げ、総合的な学習の時間で、自然共生研究センターに行くなど、校外学習や体験学習を有意義に行うことで、教科等の学習で学んだ環境学習を、さらに深めることを研究の大きなねらいとした。

2 校内の研究推進体制

研究の組織



研究の組織として、「現職教育推進委員会」にお

いて策定された基本方針をもとに、「環境教育推進部」で、環境教育の計画、内容等の検討を行い、推進 3 部会へ提案する。推進 3 部会には「教科部」「総合部」「情報部」を設置し、教科部では教科の授業を中心に「環境を大切にする心を育てる」ことをねらいに研究を進める。また、総合部では生活科や総合的な学習の活用をねらいに「体験学習」の計画を行なう。さらに情報部では教科の学習や総合の体験で学んだことを情報発信する活動を行なう。

3 研究内容

(1) グローブの教育課程への位置付け

① 教科課程と環境教育

各教科の目標や内容は環境教育と大きくかわっており、教科の学習だけでも環境教育の目標の多くは達成できると考え、教科部では教科学習や道徳等で環境にかかわる学習の機会や場を計画的に設けることができるよう以下の活動を行ってきた。

ア 「環境ナビゲーション」の作成

環境教育は、学校の全教育活動を通して行われるものであり、その推進のためには教育課程上の位置づけを明確にする必要がある。

「環境ナビゲーション」（年間指導計画）の作成に当たっては、各教科、道徳、特別活動の目標や内容について環境教育を推進するという観点に立って検討するとともに、その取り扱い方を明らかにしておくことが大切であると考えた。

指導計画の作成においては、各教科等の相互の関連や連携を図り、環境教育に関わる個々の事項を学校全体の教育計画の中に位置づけられるような工夫をする必要がある。そのことによって、一見環境教育とはかわりがないと思われる事項についても、その関連性が明らかになる場合もある。また、自然教室などの野外での宿泊を伴う教育活動などは、学校の教育活動全体の中においてどのような意味を持っているかを明確にして位置づけることが大切であると考え、以下のことに留意し「環境ナビゲーション」を作成した。

- ・ 教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間に環境学習を系統的に進める。
- ・ 環境学習を行うことができる単元を取り出し、「自然環境」と「社会環境」にかかわるものに分ける。
- ・ 一部の教科だけで行うのではなく、多くの教科、道徳、特別活動を通して行う。
- ・ 環境ナビゲーションを活用し、他教科や他領域との関連を明らかにする。

イ 「環境用語集」の作成

各教科等の内容の中で配慮されている学習内容の活用をはかるために、教科書に出てくる環境学習につながりのある用語を取り出し「環境用語集」をまとめ、系統的に指導することができるようにした。

ウ 授業計画と指導案の工夫

最初に「環境ナビゲーション」によって他教科との関連を明確にし、関連を図式化する。単元の指導計画に当たっては環境に関係する用語や内容を確認し、環境に関係するところを明らかにし、どのように指導するか計画する。

環境に関わる資質や能力としては、環境に対して積極的にかかわったり、環境を思いやったり、よりよくしようとする関心、態度及び環境とかかわり、それについて考えたり、判断したりする思考力や判断力、及び表現力。環境に関わって課題を見つかったり、解決したり、創造したりするために必要な知識・理解や技能などがあげられる。そのために、環境教育の指導案の視点として「関心」「知識」「態度」「技能」を設定し、指導のねらいを明らかにする。具体的には、環境とそれにかかわる問題に対する関心と感受性を身につける視点として「関心」、環境とそれにかかわる問題及び人間の環境に対する厳しい責任や使命についての基本的な理解を身につける「知識」、社会的価値や環境に対する強い感受性、環境の保護と改善に積極的に参加する意欲などを身につける「態度」、環境問題を解決するための技能を身につける「技能」とした。

エ 授業で環境学習

授業については、教科、道徳、特別活動の指導過程のあり方を考えた。環境学習と深いつながりのある単元では、教科等の目標とあわせ、

教師が意識したい環境指導の目標や指導したい環境関連用語と内容を計画の中に入れた。授業を進めながら、



＜環境学習の授業実践＞

環境への意識づけをするための「発問」、身近な写真などの「提示」、環境に気づかせるための「問いかけ」などで、環境教育の視点を指導過程の中に盛り込むことにより、児童に環境に対する意識を持たせたいと考えた。しかし、環境教育に偏りすぎてしまうと、本来の教科のねらいからは、ずれてしまうことのない程度でと

どめることを心がけた。そのため、授業案の中の評価には、環境の評価はあえて明記せず、児童のつぶやきや教師の観察によって児童の変容から評価をするようにした。また、社会「大きくジャンプ」、理科「とびだせ！発展」家庭科「とびだせ！」の発展教材の環境教育に関するものの活用も図っている。

環境教育の視点（「指導案」）の視点	
A	関心 / 環境問題に対する関心と感受性
B	知識 / 環境問題及び人間の環境に対する責任や使命について理解
C	態度 / 環境に対する感受性、環境の保護と改善に参加する意欲
D	技能 / 環境問題を解決するための技能

○ 教科授業での指導例 — 5年生国語科 —

- 1) 単元名 大造じいさんとガン
- 2) 単元における環境教育の視点

現在は、ガンの狩猟が禁止され天然記念物に指定されたり、ハヤブサがレッドデータブックでは絶滅危惧種に選ばれたりしていることなどから、70年ほど前と現在の環境の変化を考えさせるきっかけとしたい。また、ハヤブサやガンの生態を知らせ、野鳥の生きる知恵や生活に興味を持たせたい。さらに、物語にたびたび表現されている自然の情景描写から自然の美しさを感じ取らせたい。

授業においては、「環境を意識させる提示」で生き物の写真や地域で撮影した写真を取り上げたため、「暁の空だから、獲物を捕ろうとする強い気持ちを感じた」とか「家の近くでも、よく野鳥が飛んでくる」などの発言が聞かれた。児童は、より現実に近い情景を思い浮かべて心情を読み取ったり、身近な環境に興味を持ったりすることができた。

○ 発展教材での指導例 — 6年理科指導案 —

- 1) 単元名 植物のからだのはたらき
- 2) 単元における環境教育の視点

これまでに、植物の葉に日光が当たるとでんぷんができることを学習したが、それだけでは植物の体のはたらきを十分にとらえたとはいえない。でんぷんが何のためにつくられ、何に使われるのかをとらえることで、植物のからだのはたらきを総合的にとらえさせたい。

いもや種子などに貯蔵されたでんぷんを人や動物が食べ、成長のための養分になっていることにふれ、日光・植物・人のかか

わりに気づかせたい。

この発展教材「とびだせ」では、1時間の授業すべてが環境教育になった。「人と植物のかかわりを意識させる発問」から、児童は、「私たちは外から栄養をとっているのに、植物たちは自分で栄養を作っているのですごい。食べ物に感謝したい」とか「私たちは命をいただいている。これからも、『いただきます』を忘れない」などの発言が聞かれた。これは、環境と人とのつながりを考えると同時に、環境から命の大切さを考えることのできた授業であった。

② 体験活動と環境教育

総合部では、教科や道徳などの環境学習で積み上げた環境に対する知識や環境改善への意欲を、総合的な学習や生活科での体験活動に生かすよう、学年間の調整を図りながら、以下の活動を行ってきた。尚、総合的な学習の時間は、70時間をあてた。

1) 「総合的な学習の時間」「生活科」の活用を年間計画としてまとめる。

<総合の年間テーマと内容一覧>

テーマのねらいは、低学年「自然環境」、中学年「地域環境」、高学年「社会環境」とした。

年	テーマ	ねらい	活動内容
1年	ぐんぐんのびろー土からうまれ、土へかえるー	身近な植物に興味・関心を持ち、それらに生命があることに気づき、植物を大切にすることを育む。	植物の栽培、クラスの木の継続観察、木の葉や実を使った遊びや工作、野道の散策遊び
2年	草平がっく、大すきたんけんー自然や人々とかかわりー	校区探検を行い、住んでいる校区の人や自然について知る。自然との触れ合いの中で自然への関心を高める。	学区探検、草平マップ作成 野菜の栽培、自分の木の継続観察、生き物の観察
3年	見つけよう人にやさしい愛西市ーわたしたちにもできるよー	身近な施設や工場の見学を通して、環境やボランティアに関心をもち、自分たちでできることを考えたり、伝えたりする活動に取り組む。	身近な施設や工場見学、ボランティア実践、環境に配慮したまちづくり、活動発信

4年	ずっとすみたい愛知！ー今、わたしたちができることー	毎日の生活を見直すことにより身近な環境問題に気づき、環境を大切にしていこうとする気持ちを高める。	ごみの減量、ゲストティーチャー（メリ夫くん）講演 環境ボランティア隊の活動 2分の1成人式で環境学習まとめ発表
5年	ずっとすみたい郷土日本ー現在をみつめようー	郷土の自然や産業に目を向け、自然を感じ、自然を考え、身近な環境をよりよいものにしていく気持ちを高める。	バケツで稲作り、自然にやさしい野外炊飯、ウォークラリーやネイチャーゲーム 新聞記事を収集まとめ
6年	守ろう地球Ⅲーつなげよう！明日へー	身近な環境から課題を見つけ、追究・実践し、環境を大切にしようとする気持ちを高める。	法隆寺ウォークラリーや太秦寺子屋体験、出前授業や調べ学習、「やるキッズあいち劇場」への参加

(2) グローブを活用した教育実践

① 1年生の実践

アサガオやマリーゴールド、サツマイモなどの植物を栽培や自然観察のひとつとして校庭にある木々の中から、



<種や葉を観察>

クラスの木を決め、四季ごとに観察した。自然案内人と草花ウォッチングに出かけ、校庭にある々を観察した。クスノキの葉を昔の人は虫除けとしてたんすに入れていたと聞き、さっそ



く葉を拾い、においをかいでみた。

学校周辺や公園の探検に出かけ、草花以外の生き物なども見つける。見つけた生き物などについて発表し、



春から夏への自然の移り変わりに気づく。

② 2年生の実践

校区探検を行い、住んでいる校区の人や自然について知り、自然とのふれあいの中で自然への関心を高めてきた。



<本で調べる>

生き物と仲良く遊んだり、観察したり、飼育する生き物のすみかやえさについて、調べたりした。



また、校庭の樹木の観察をし、自然とのかわりを深めるきっかけづくりとしている。1年生のクラスの木に加え、2年生では校庭にある「クリ」「タイサンボク」「ビワ」などの樹木や、地域探検に行つて気になる木を見つけては、みんなで観察している。

③ 3年生の実践

身近な施設や工場の見学を通して、環境やボランティアに関心をもち、自分たちにできることを考えたり、伝えたりする活動に取り組んだ。

大型スーパーマーケットの見学をし、ごみを減らすために、「マイバック」を持って買い物に来る呼びかけや、レジ袋を使わないようにする計画を聞いた。また、空き缶やペットボトル、トレーなどの回収コーナーを設け、資源のリサイクルを積極



的に呼びかけることを学んだ。他にも、シャンプー工場の使った水は川の水を汚さないように、浄水処理施設できれいな水にしてから、流しているという環境にやさしい取組がなされていることに感心し、「環境新聞」にまとめて発表した。

④ 4年生の実践

毎日の生活を見直すことにより、身近な環境問題に気づき、環境を大切にしようとする気持ちを高め



<下水処理施設の見学>

てきた。下水道科学館と上流浄化センターの見学では、環境について、正しい知識を得ると同時に、水の処理を実際に見たり、その仕事に携わる人に実際に質問したりすることによって地域の現状をより把握することができた。

身の回りのごみを減らそうと、社会科の学習と関連させて、家庭から出るごみ、学校のごみ、地域に落ちているごみの調査を



した。ごみの多さに驚きを感じた子が多かった。そこで、このごみをどうにかできないか考え、ごみの減量につながる「クリーン作戦」を実施した。自分たちにできることで、一番身近なごみを減らすことから始めようということになり、家庭、学校、地域の人に呼びかけることからスタートした。子どもの発想が、家族、地域の人にも広がり、環境をもう一度考えてみるきっかけができた。



⑤ 5年生の実践

郷土の自然や産業に目を向け、身近な環境を感じ取り、環境をよりよいものにしていく気持ちを高めるため、校内フィールドビンゴで自然を見る目を養ったり、総合的学習の時間に年間を通して、バケツ稲づくりに取り組んだ。

社会科「わたしたちの食生活と食料生産」、理科「植物の発芽と成長」と関連させ、自然環境に

について考えた。

一人一人が一個のバケツに種もみをまき、発芽や成長の様子を観察した。ゲストティーチャーとしてJAの方を招き、種まきや苗を根づかせるコツについて教えて頂いた。一人ひとりが自分の稲の出穂、稲刈り、脱穀までのサイクルを観察し、ノートにまとめを行なった。



⑥ 6年生の実践

身近な環境から課題を見つけ、追究・実践し、環境を大切にしていよよく生きようとする気持ちを高めることを目的にエネルギーについて学習した。企業の環境への取組を電力会社の出前授業をしていただいた。家庭にある電気製品から電気のある暮らしを意識し、磁石とコイルで電気をつくる実験をした。手回しで必死に回しても小さな豆電球の明かりしか灯すこ



<磁石とコイルで発電>

とができず、電気をつくるには、多くのエネルギーが必要であることを実感した。また、地球温暖化によって氷河が溶けている様子や砂漠化が進んでいる様子を写真で見て、問題の深刻さを知ることができた。新エネルギーの開発実際の器具を使って、太陽光発電や風力発電のしくみを体験することができた。二酸化炭素を出さないクリーンなエネルギーへの期待が高まった。さらに、温暖化をくいとめるために何ができるか「電力会社では、できるだけ少ない燃料で発電したり、できるだけ二酸化炭素を出さないような工夫をしている」という説明の後、私たちにできる「省エネ」「ゴミ減量」



についてグループに分かれ話し合った。企業だけでなく、私たちにもできることがたくさんあることに気づいた。

⑦ グローブの観測体制

本年度は委員会活動の中で希望者を募り、5年生の児童を中心に観測活動を行なっている。最初に、これまであまり使用されていなかった百葉箱の整備を行い、記録のとり方を確認した。また、近くにある河川に出かけ、水質の観測も開始した。月に1, 2回程度の割合で学区にお住まいの環境カウンセラーに来ていただき、児童といっしょに環境について考えている。観測結果や校内のエネルギー使用量などを全校児童に発信したり、二酸化炭素の排出量削減を目指し、節電や節水の呼びかけを行なったりしている。また校内には新たに雨水タンクを設置するなど環境に配慮した施設の充実にも努めている。

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

自然とのかかわりを深めるきっかけづくりや、自然を大切にしている授業や社会環境を意識させる体験活動、新聞やニュースなど社会の情報を取り入れた教科等の授業や多くの体験活動を積み重ねたことにより、身近な環境に興味をもち遊びや体験を通して、自然を大切にしている心が育ち、環境を意識した生活や実践が見られるようになった。学校生活だけでなく、家庭においても環境を考えた行動がとれるようになってきている。また、教師自身の環境に対する考え方や感じ方の変化も見られ、環境関連の新聞記事やニュースが目につくようになったり、日常生活で植物、鳥、昆虫、空などの自然を眺めるなど、自然を楽しむ気持ちが高まったりしてきている。

2 研究の課題

心を育てることから環境教育を進めてきたが、次年度では身近な豊かな自然環境をもっと生かした実践活動や観測を取り入れた活動へつなげるなど、年間の計画に盛り込むようにしたい。

V 研究第2年次の活動計画

1 学年での取り組み

各学年の体験活動の中に、継続した観測や観察を取り入れ、グローブ活動を充実させる。

2 グローブ委員会の設置

グローブ活動を児童会の組織に入れ、常時活動ができるようにする。

- (1) 目標を設定し、グローブ活動を基にした環境保全活動を全校での取り組みにつなげる。
- (2) 環境保全の実践活動を計画する。
- (3) ホームページ、通信、掲示の活動に加え、集会などの情報発信活動を充実する。